

Title	高知県四万十市西土佐方言における逆接表現
Author(s)	野間, 純平
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 11 P.15-P.27
Issue Date	2013-03
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/24763
DOI	10.18910/24763
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

高知県四万十市西土佐方言における逆接表現

野間 純平

【キーワード】西土佐方言、逆接表現、ノニ、テモ、タッテ

【要旨】

本稿では、高知県四万十市西土佐方言における逆接表現の調査結果を報告する。調査では、標準語の「ノニ」と「テモ・タッテ」に相当する表現を対象とした。調査の結果、以下のことがわかった。

- (a) ノニ相当形式には、ニ、ガニ、ガジャニ、ガヤニ、ノニがある。これらの形式の間どのような使い分けの規則があるのかは今回の調査ではわからなかったが、ガニは文末で使われやすい、ガヤニは話し手に状況がわかっている場合に用いられやすいといった内省が得られた。
- (b) テモ・タッテ相当形式には、タチ、チ、ジャチ、テモがある。タチ、チ、ジャチに関しては、それぞれ接続が異なっており、複雑な様相を示す。これらは変化の過程にある、もしくはそれが化石化したのかもしれない。

1. はじめに

本稿では、2011年7月、9月、2012年7月に行ったフィールドワークのうち、「逆接表現」の調査の結果報告を行う¹⁾。本稿の構成は以下の通り。まず2節では、本稿で言う「逆接表現」が何を指すのかを簡単に示し、3節では調査概要についてまとめる。そして、4節ではノニ相当形式、5節ではテモ・タッテ相当形式について結果をまとめる。最後に6節で今後の課題を述べる。

2. 逆接とは

三井(2002:85)は、条件表現を次のように分類している。

表1 条件表現の類型(三井2002:85)

	仮定	事実(確定)
順接	努力すればできるようになる。	努力したのでできるようになった。
逆接	努力してもできるようにならない。	努力したのにできるようにならなかった。

1) 本稿の作成は野間が行ったが、調査は野間と高木千恵(教員)と水野恭司(大学院生)、武井紀子(研究生)で分担して行った。

「仮定」「事実（確定）」とは、前件で述べられている条件が、仮定的に予想されていること（仮定）なのか、実際に起こったこと（確定）なのかという区別である（以下、前田（2009）にならい、これを「リアリティー」と呼ぶ）。「順接」「逆接」というのは、前件の内容から後件の内容が順当に予想される（順接）か、予想に反する（逆接）かという区別である。これらの2つのパラメーターをクロスさせると、条件表現は表1のように4種類に分けられる。

以上の類型に従うと、本稿で扱う「逆接表現」は、表1の下段、つまり、逆接仮定条件文と逆接確定条件文ということになる。表1を見るとわかるように、標準語では、前者でテモ、後者ではノニ（ガ、ケレドモも使える）という形式が用いられている。

そこで、本調査では、標準語のテモとノニに相当する西土佐方言の形式について調査した。詳細は次の節で述べる。

3. 調査概要

3.1. 調査項目

先ほど述べたように、今回調査項目としたのは、次の2種類である。

- ① ノニ相当形式
- ② テモ・タッテ²⁾相当形式

3.2. 調査の意図

三井（2002:85）は、方言の条件表現を取り上げるにあたって、共時的な方法に限っても、次のような3つの観点と考えられると述べている。

- ① 諸方言における形式のバリエーションと分布を明らかにする。
- ② 特定の形式の意味用法を記述する。
- ③ 特定の方言における、条件表現の体系を記述する。

このうち、本調査は、③を前提とした②に当たると考えられる。つまり、西土佐方言という1つの方言における条件表現の体系を記述する前の段階として、個別の形式を記述する段階に当たる。

今回の調査は、西土佐方言において逆接表現に用いられる形式を確認した上で、単に意味用法を記述するというよりは、複数の形式の使い分けについて記述するというのがメインになる。以下では、ノニ相当形式とテモ・タッテ相当形式のそれぞれで、調査時に用いた意味のパラメーター（質問の意図）をまとめる。なお、いずれも前田（2010）を参考にしている。

2) 調査票の例文はすべてテモを用いた例文だが、標準語のタッテに相当する形式（タチなど）も回答されたため、本稿ではテモ・タッテ相当形式とする。

3.2.1. ノニ相当形式

3.2.1.1. 形式的パラメーター

形式的なパラメーターとしては、ノニ相当形式が接続する語の種類（動詞、形容詞、形容動詞、名詞）と形（丁寧体、推量形）がある。また、文中における位置によって、従属節を作る用法、文末に現れる終助詞的用法、文頭に現れる接続詞的用法に分けられる³⁾。

- (1) あと少しで合格できたのに。 【終助詞的用法】
 (2) わたしは毎日水をやった。なのに、枯れてしまった。 【接続詞的用法】

3.2.1.2. 意味的パラメーター

表1に示したように、標準語のノニは、条件が確定的であるときに用いられる。

- (3) 雨が降ったのに、試合は行われた。 【確定条件】

- (4) 雨が {*降る のに / 降っても}、試合は行われるだろう。 【仮定条件】

したがって、前件の条件が仮定的か事実的かという意味的なパラメーターは設定せず、もっぱら後件の意味内容に注目した。

- (5) あの人があんなに食べるのに、やせている。 【述べ立て】
 (6) まだ治っていないのに、無理をするな。 【禁止】
 (7) 合格できると思っていたのに、だめだった。 【望ましくない事態】
 (8) 無理だと思っていたのに、合格した。 【望ましい事態】

3.2.2. テモ・タッテ相当形式

3.2.2.1. 形式的パラメーター

本調査において用いた、テモ・タッテ相当形式の形式的パラメーターは、次のとおりである。

- ① 接続する語の種類および形（品詞と肯否）
- ② 統語的位置（従属節用法、助動詞的用法、接続詞的用法）
- ③ 条件節の並列
- ④ 疑問語との共起

②における「助動詞的用法」というのは、次の(9)の「てもいい」のような、複文を作っているというよりも、後続する語（主節の述語に相当）と合わさってモダリティ形式となっているものを言う。

- (9) あそこには行かなくてもいい。 【助動詞的用法】

また、③の「条件節の並列」とは、(10)のように複数の条件節が並列され、どちらも同じ

3) 以下、本稿の例文においては、問題となる部分の方言形をカタカナで表記し、それ以外は標準語形を漢字かな混じりで表記する。なお、本文中で問題となる形式に言及する際は、標準語形も方言形もカタカナで表記する。

帰結を導くようなものを言う。

- (10) 電車で行ってもバスで行っても、かかる時間は変わらない。 【条件節の並列】

3.2.2.2. 意味的パラメーター

表1にあるように、標準語のテモは基本的に前件が仮定的な条件を表す場合に使われる。しかし、次のように、前件が確定条件の場合でもテモが使える場合がある。

- (11) 徹夜しても、結局仕事は終わらなかった。 【事実的用法】

また、前件が事実と反することを表す場合にも使える。

- (12) あそこから走っても、間に合わなかっただろう。 【反事実的条件】

まとめると、テモ条件文は、前件のレアリティによって、以下のように分けられる。

(A) 仮説的用法

(A-1) 仮説的条件 (今から走っても、間に合わないだろう)

(A-2) 反事実的条件 (あそこから走っても、間に合わなかっただろう)

(B) 事実的用法 (徹夜しても、結局仕事は終わらなかった)

一方、後件のモダリティも意味的パラメーターとしている。具体的には、〈推量〉〈命令〉〈断定〉〈問いかけ〉の4つである。

- (13) 走らなくても、間に合うだろう。 【推量】

- (14) 少しくらい暑くてもがまんしろ。 【命令】

- (15) 9時に出てもじゅうぶん間に合う。 【断定】

- (16) 9時に出ても間に合うか? 【問いかけ】

また、助動詞的用法においては、次のように、テモの後の意味内容を様々に変えて聞いている。

- (17) 酒を飲んでもいいか。 【許可求め】

- (18) わたしが代わりにやってもいいよ。 【許容】

- (19) おかしいなあ。もうそろそろ着いてもいいころなのに。 【推論】

以上のようなパラメーターを設定して作成した調査票に基づいて調査を行った。

3.3. インフォーマント

インフォーマントに関する情報は次ページの表2のとおりである。なお、2011年9月に調査を行ったAKM、ALM、ANFの3人には、テモ・タッテの調査はしていない。

4. ノニ相当形式

ここからは、調査の結果をまとめていく。本節ではノニ相当形式を取り上げる。まず、形式の整理を4.1節で行った後、4.2節で意味的特徴についてまとめる。

表2 インフォーマント情報

話者ID	年齢	性別	居住歴	調査項目	調査時期
AFM	79	男性	0-大宮	ノニ、テモ・タッテ	2011年7月
ADF	82	女性	0-大宮	ノニ、テモ・タッテ	2011年7月 2012年7月
AHM	74	男性	0-大宮	ノニ、テモ・タッテ	2011年7月
AKM	72	男性	0-大宮	ノニ	2011年9月
ALM	70	男性	0-15 大宮、15-18 中村、18- 大宮	ノニ	2011年9月
ANF	65	女性	0-大宮	ノニ	2011年9月
ASF	62	女性	0-16: 大宮、16-19: 岡山県、 19-62: 大宮(西土佐他地域での居住歴あり)	ノニ、テモ・タッテ	2012年7月

年齢は初回調査時のもの。

4.1. 形式的特徴

ここでは、3.2.1.1 節で述べたパラメーターに従って、形式的特徴についてまとめていく。まずは 4.1.1 節で回答に現れた形式を整理し、4.1.2 で接続、4.1.3 で統語的位置の特徴についてまとめる。

4.1.1. 現れた形式

調査で回答された、標準語のノニに相当する形式は、ニ、ガニ、ガジャニ、ガヤニ、ノニ⁴⁾の5種類である。

- (20) あの人にあんなに食べるニ、痩せている。
- (21) 合格できると思っていたガニ、だめだった。
- (22) あんなに家が近かったガジャニ、いつも遅刻していた。
- (23) あんなに家が近いガヤニ、あいつはいつも遅刻する。
- (24) せっかく木を植えたノニ、枯れてしまった。

いずれも「ニ」という形式を含んでいるため、「ニ」を分出できると考えられる。つまり、「ニ」という助詞があって、その前に何もつかないもの(ニ)と準体助詞がつくもの(ガニ、ガジャニ、ノニ)とに分かれるということになる。

ただ、ガジャニとガヤニのジャ、ヤとは何かという問題がある。音形から判断するとコピュラと考えられ、標準語に対応させると「*ノダニ」となる。『方言文法全国地図』第40図「植えた のに (枯れてしまった)」にも、このような語形はない。では、ジャとヤがコピュラだったとして、なぜそのような形式があるのだろうか。ここでは、1つの仮説として、ジャニ・ヤニをその出自として考えてみたい。次のように、名詞述語にニが続く場合、コピュラにそのまま接続して「名詞+ {ジャ/ヤ} +ニ」となる。

- (25) もう出発の時間 {ジャニ/ヤニ}、なかなか来ない。

4) 「ノニ」は標準語的で上品というイメージがあるというコメントがあった。

しかし、これが「名詞+ {ジャニ/ヤニ}」と再分析され、用言述語の場合は準体助詞「ガ」をつけて名詞化して「用言+ガ+ {ジャニ/ヤニ}」となったのではないか。なお、もしこの仮説が正しいとしても、ガニはこの変遷には位置付けられないと思われる。4.2節でも触れるように、西土佐方言のガニは、標準語のノニに対応する接続助詞として存在はするが、あまり自然に用いられることはないようである。おそらく、標準語のノニの対応置換によってできたものではないかと考えられる⁵⁾。ガジャニ・ガヤニという語形を回答したのが、ALM、ANF、ASFという比較的若い人だったので、新しい形式とも考えられる。

4.1.2. 接続

各形式の接続については、その適格性において、インフォーマント間の違いがあり、全員一致で不適格と判断した例文はほとんどなかった。その中でも一致を見たのは、推量形に後接できるのはニだけだということである。

(26) つらいロー {φ/*ガ/*ガジャ/*ノ} ニ、愚痴を言わずに頑張っている。

これは、標準語でも「*つらいだろうノニ」のように言えず、「つらいだろうニ」のように言うのと平行的である。これは、次の標準語の例文のように、標準語でも西土佐方言でも、準体助詞が作る名詞節の中に推量形が入れないことによるものだろう。

(27) 夕方から雨が降るのを知っていたので傘を持ってきた。

(28) *夕方から雨が降るだろうのを知っていたので傘を持ってきた。

以上のことから考えると、ニとガニ・ガジャニ・ノニは、文中における位置が異なる形式ということになる。このような文中の位置の違いを見せるのは、現在確認されている限りでは推量形に後接するときのみ⁶⁾で、他の形をとる述語には、不適格とするインフォーマントもいるものの、おおむねどれにも接続できる。

(29) せっかく木を植えた {φ/ガ/ガジャ/ノ} ニ、枯れてしまった。

(30) あんなに家が近い {φ/ガ/ガジャ/ノ} ニ、あいつはいつも遅刻する。

(31) もう出発の時間 {ジャ/ナガ⁷⁾/ナガジャ/ナノ} ニ、まだ来ない。

(32) あの人はあんなに飲みます {φ/ガ/ノ} ニ、全然酔いませんね⁸⁾。

4.1.3. 統語的位置

統語的位置、つまり、当該形式が従属節を作るか、文末にくるかの違いによる形式の使い分けは特に見られなかった。

(33) あと少しで合格できた {φ/ガ/ガジャ/ノ} ニ。

-
- 5) 接続助詞ノデに相当するガデについても同様のことが考えられる。本誌所収の報告「高知県四万十市西土佐方言における準体助詞」(p.11)も参照されたい。
- 6) 標準語も西土佐方言も「推量形+ニ」がかたまりで残っているのかもしれない。
- 7) 「ナガニ」という形が言えないと回答したインフォーマントは2人いたが、このような名詞述語+ガという形は、準体助詞の調査でも内省がゆれることが多かった。詳しくは、本誌の「準体助詞」(p.10)を参照されたい。
- 8) 西土佐方言では普段デス・マスは使わないので、答えにくそうだった。

また、接続詞的用法については、直前で文が切れるということがインフォーマントに伝わりにくかったせいか、あまり回答が得られなかった。その中でも、接続詞的用法のノニとして得られた語形は「ナガニ」「ソレジャニ」「ホンジャニ」の3つである。

(34) 私は毎日水をやった。{ナガニ/ソレジャニ/ホンジャニ} 枯れてしまった。

4.2. 意味的特徴

今回の調査では、3.2.2.2 節で述べたような意味の違いによる形式の使い分けは見られなかった。したがって、今回は意味的特徴に関することはほとんど何も言えないが、気になったことを少し述べておく。

(a) 最も自然に使用されるのは「ニ」

あくまで予想の域を出ないが、ノニ相当形式の調査文で、インフォーマントから出てくる方言翻訳では、多くの場合ニが使用されている。また、「ガニ」と比べると、不適格と判断されたものが少なく、以下の3つのみである。

(35) せっかく木を植えた {*ニ/ガニ}、枯れてしまった。 【AHM】⁹⁾

(36) あんなに家が近い {*ニ/ガニ}、あいつはいつも遅刻する。 【ADF】

(37) だからやめろと言った {*ニ/ガニ}。 【ADF】

また、4.1.1 節で述べたように、ガジャニ・ガヤニがニ（実際はジャニ）からできたものならば、ニのほうが古いということになる。さらに、これも4.1.1 節で述べたが、ガニというのは標準語のノニの対応置換でできた形式である可能性もある。以上のことから、西土佐方言では、ニが最も伝統的で、インフォーマントが最も自然に用いるものだと予想できる。ただし、実際の頻度については、自然談話を分析する必要がある。それに関しては稿を改めて論じたい。

一方、ガニは主に女性に不適格の内省が多いが、それに規則性は見られない。準体助詞の調査をしているときにもあったが、女性のインフォーマントは、準体助詞ガに関して「私らはガなんて使わない」というコメントをよくしていた。また、ASF は「ガニは文末で使える」という内省をしている。つまり、西土佐方言におけるガニは、標準語のノニに相当接続助詞として存在するが、あまり用いられないということになる。これはおそらく、4.1.1 節で述べたように、ガニが標準語のノニの対応置換によって作られたからだと思われる。

(38) あの人はあんなに食べる {ニ/*ガニ} 痩せている。 【AFM・ADF】

(39) せっかく木を植えた {ニ/*ガニ/ノニ}、枯れてしまった。 【ADF】

(40) あんなに家が近い {ニ/*ガニ/ノニ/ガジャニ}、あいつはいつも遅刻する。

【ANF】

(41) あんなに家が近かった {ニ/*ガニ/ガジャニ}、いつも遅刻していた。

【ANF】

9) インフォーマントによって内省が異なる場合、【 】の中のIDはその内省をしたインフォーマントを指す。

- (42) もう出発の時間 {ジャニ/*ナガニ}、まだ来ない。 【ADF・ALM】
 (43) つらいロー {ニ/*ガニ}、愚痴を言わずに頑張っている。 【AKM・ANF】
 (44) まだ治っていない {ニ/*ガニ}、無理をするな。 【ADF】

(b) 「ガジャニ」「ガヤニ」はノダの意味合いを含む

「ガジャニ」という形式を回答したのは ALM と ANF の 2 人だけだが、ANF は次の (45) と (46) で「ガニよりガジャニ」と言っていた。

- (45) あんなに家が近い {*ガニ/ガジャニ}、いつも遅刻する。 【ANF】
 (46) あんなに家が近かった {*ガニ/ガジャニ}、いつも遅刻していた。 【ANF】

どちらも形容詞に接続するので、そのせいかもしれないが、ガジャニのほうがガニよりも広く使われているように見える。

一方、次のような場合にガジャニは使えないというコメントもあった。

- (47) まだ治っていない {ニ/ノニ/*ガジャニ}、無理をするな¹⁰⁾。 【ANF】

これに関して ANF は、「病人にガジャニと言っではいけない」と言っている。また、ASF は「ガヤニは話し手が背景を知っているときに使う」と指摘していた。これらの指摘を踏まえると、(47) でガジャニが使えないのは、聞き手の病気がまだ治っていないことを話し手が決めつけることになるからではないかと考えられる。このように、ガヤニ（そしておそらくガジャニも）が「話し手が背景を知っている」という条件は、話し手が知っていることを聞き手に提示するという機能を持ったノダ文（野田 1997 など）の特徴に似ている。

以上、ノニ相当形式の意味的特徴について述べた。とは言っても、今回の調査では特に確実なことが言えなかったため、今後の調査では、今回設定した以外の意味的パラメーターを考える必要がある。また、複数の形式が併用されているということから、変化の過程にあるという可能性もある。今回の調査では明らかにできなかったため、このことについては、今後の課題としたい。

5. テモ・タッテ相当形式

本節では、テモ・タッテ相当形式の調査結果をまとめる。5.1 節で形式的特徴について、5.2 節で意味的特徴について述べる。

5.1. 形式的特徴

まずは、調査で回答された形式を 5.1.1 節で整理し、3.2.2 節で述べたパラメーターに従って形式的特徴を 5.1.2 節でまとめる。

5.1.1. 現れた形式

テモ・タッテ相当形式には、「タチ (-tati)」「チ (=ti)」「ジャチ (=zjati)」「テモ (-temo)」の 4 つの形式が認められた。それぞれの形式の接続について、次の表 3 にまとめる。

10) 「ガニ」は未調査。

表3 テモ・タッテ相当形式の接続

形式	前接要素	例
タチ (-tati)	動詞・形容詞語幹 動詞否定形	ハシッタチ アツタチ ハシランダチ
チ (=ti)	動詞否定形 コピュラ	イカンチ コドモジャチ
ジャチ (=zjati)	動詞否定形	ハシランジャチ
テモ (-temo)	動詞・形容詞語幹 動詞否定形 形容動詞語幹、名詞	ハシッテモ ハシランデモ アツーテモ イヤデモ

このうち、タチ、チ、ジャチの3つは、いずれも「チ」という共通部分を持っているので、「チ」という形態素を取り出すという方法も考えられるが、まずはそれについて検討してみたい。

表4 タチ・チ・ジャチの接続

形式	語幹	動詞終止形	動詞否定形	コピュラ終止形
タチ	○	—	○	—
チ	×	×	○	○
ジャチ	—	×	○	×

○:接続可能 ×:接続不可 —:未調査
「語幹」にはコピュラの語幹も含む。

表4は3形式の接続をまとめたものである。タチの「タ」は過去を表す「タ」と同様のもののように思える。5.1.1.1の例文を見てもわかるように、語幹にタチが接続する際の連結音は、「タ」が接続するときと同じである。このことから、「タ」と「チ」を別々の形態素と分析したいところだが、「タ」と対立をなす「ル ((r)u)」(表4の「動詞終止形」に当たる)に「チ」を接続させることはできない。この点において、タチを「タ」と「チ」に分けることはできない。また、ジャチは、コピュラ「ジャ」にチが接続したものと考える方法もあり得るが、「イカンジャチ」のように、動詞否定形にジャチがつくことを考えると、動詞否定形にコピュラが接続しなければならない。しかし、この方言ではそのような現象は見られない。したがって、否定形とコピュラにつくチと、否定形につくジャチの2つに分けなければならない。これは、4.1.1節で述べたノニ相当形式のガジャニ・ガヤニと同様に、もともとチだったものが、コピュラを取り込んで成立したものと思われる。

以上のように、一見「チ」が共通しているように見える3形式タチ、チ、ジャチだが、形態的にはこれ以上分けられないということになる。また、表4を見るとわかるように、

なぜかいずれの形式も否定形に接続できる。以下では、それぞれの形式に分けて、形式的特徴を詳しく述べる。

5.1.1.1. タチ

「タチ」は今回出てきた形式の中でも広く使われる形式で、動詞と形容詞に接続する。

(48) あそこからハシッタチ¹¹⁾、間に合わなかっただろう。

(49) 若いころはどんなにノンダチ¹²⁾平気だった。

(50) 少しぐらい {アツタチ/アツカッタチ} 我慢しろ。

(51) 昼間は {アツータチ/アツカッタチ} 夕方になれば涼しくなるだろう。

tati は名詞には接続しない。また、(45) の調査文では「アツカッタチ (atu-kaQ-tati)」という形式も認められた。

また、「タチ」は動詞否定形につくこともできる。

(52) ハシランダチ間に合うだろう。

5.1.1.2. チ

「チ」は名詞、形容動詞に (コピュラを介して) 接続する。

(53) イヤジャチ、みんな、ちょっとの間なら我慢できるだろう。

(54) そんなことはコドモジャチ知っている。

このジャは、名詞や形容動詞についていることから、コピュラだと考えられる。つまり、このチは、コピュラにつく形だと言える。

また、チは動詞の否定形にも接続する。形容詞、形容動詞、名詞の接続は本調査文では認められなかった。

(55) おまえがイタチ、イカンチ、結果はどうせ同じだ。

5.1.1.3. ジャチ

コピュラのジャにつくチの例を 5.1.1.2 節で見たが、次のような例もあった。

(56) あそこにはイカンジャチいい。

(57) お前がイッタチ、イカンジャチ、結果は変わらないだろう。

上の例では、ジャチのジャが動詞否定形に接続している。このジャをコピュラとするなら、動詞否定形に接続しているのはおかしい。この調査文では、回答をしたインフォーマント全員が「イカンタチ」ではなく「イカンジャチ」と言うまたは、言うかもしれないと答えている。若い人の言い方だという指摘するインフォーマントもいる。このことから、本稿ではジャチとして一つの形式と取り上げているが、なぜ否定形にしか接続しないのかは不明である。可能性としては、4.1.1 節で述べたガジャニ・ガヤニと同じように、コピュラのジャがチについて再分析されたものではないかと考えられる。

11) hasir-i-tati > hasiQtati という音変化を経ていると想定できる。

12) nom-i-tati > noNtati > noNdati という音変化を経ていると想定できる。

5.1.1.4. テモ

標準語と同じ形式テモは、接続面でも標準語と同じで、動詞、形容詞、形容動詞のそれぞれ語幹に接続し、名詞にはコピュラを介さず接続する。また、撥音の直後と、形容動詞語幹と名詞に接続する場合、デモという異形態をとる。

- (58) 9時にデテモたぶん間に合うだろう。
- (59) ハシランデモ間に合うだろう。
- (60) 少しぐらい {アツクテモ/アツテモ/アツカッテモ¹³⁾} 我慢しろ。
- (61) イヤデモ、みんな、ちょっとの間ならがまんできるだろう。
- (62) 雨デモ、あの人は仕事に行くだろう。

5.1.2. 統語的位置

助動詞的用法で用いられたのは、基本的にタチとテモである。

- (63) 酒を {ノンダチ/ノンデモ} いいか?
 - (64) おかしいなあ。もうそろそろ {ツイタチ/ツイテモ} いい頃なのに。
ただし、次の例文には「ンジャチ」が回答された。
 - (65) あそこには {イカンチモ/イカンジャチ/イカンデモ¹⁴⁾} いい。
この「イカンジャチ」という形は新しい言い方であるという指摘もあった。
- 一方、接続詞的用法では「それでも」に相当する言い方として「ソレジャチ」「ソレデモ」が、「それにしても」に相当する言い方として「ソレニシタチ」「ソレニシテモ」があった。

5.1.3. 条件節の並列

条件節が並列する例は、すべての形式で確認された。

- (66) お前が {イッタチ/イカンチ/イカンジャチ/イッテモ} 同じだ。
 - (67) 書いても {カイトチ/カイトモ} 終わらない。
- ただし、1つの調査文ですべての形式が回答されたわけではない。

5.1.4. 疑問語との共起

疑問語との共起が確認されたのは、タチとテモのみである。

- (68) 何を {ユータチ/ユーテモ} 無駄だ。

5.2. 意味的特徴

今回の調査では、不適格と判断された例文がほとんどなく、それぞれの形式の意味的な違いは確認できなかった。

- (69) 今から {ハシッテモ/ハシッタチ} 間に合わないだろう。

13) 5.1.1.1 節の「カッタチ」と同様に、「カッ (-kaQ-)」を挟む。

14) イ音便形の「イカイデモ」となることもある。

- (70) 少しぐらい {アツータチ/アツーテモ/アツカッテモ} 我慢しろ。
(71) 9時に {デタチ/デテモ} 十分間に合う。
(72) 9時に {デタチ/デテモ} 十分間に合うか？
(73) あそこから {ハシッタチ/ハシッテモ} 間に合わなかつたろう。
(74) 若いころは、どんなに {ノンダチ/ノンデモ} 平気だった。
(75) もうひとつ {コータチ/コーテモ} よかつたなあ。

また、ほとんどの例文でタチとテモが回答語形として出ており、ンチ、チ、ンジャチは「チ」という形を共有していることから、やはり意味的にもタチと共通しているのではないかと考えられる。ただし、今回の調査はタチとテモの使い分けを調べるものだったので、「タチ」のバリエーションについては考慮しておらず、聞けていない形式も多い。また、「タチ」以外の「チ」を含む語形は、名詞述語や否定形に接続することが多く、そのあたりの形式的な分析を進めるのが先になるだろう。また、今回用意した意味的パラメーターでは各形式の使い分け基準が明らかにならなかったため、他のパラメーターを考える必要もある。タチとテモが完全にバリエーション関係にある、もしくは変化の過程にあるということかもしれない。

6. 今後の課題

以上、本稿では、西土佐方言の逆接表現についての調査結果の報告を行った。調査で明らかになったことをまとめると次のようになる。

- (a) ノニ相当形式には、ニ、ガニ、ガジャニ、ガヤニ、ノニがある。これらの形式の間にどのような使い分けの規則があるのかは今回の調査ではわからなかったが、ガニは文末で使われやすい、ガヤニは話し手に状況がわかっている場合に用いられやすいといった内省が得られた。
- (b) テモ・タッテ相当形式には、タチ、チ、ジャチ、テモがある。タチ、チ、ジャチに関しては、それぞれ接続が異なっており、複雑な様相を示す。これらは変化の過程にある、もしくはそれが化石化したのかもしれない。

ノニ相当形式もテモ・タッテ相当形式も、どちらも形式のバリエーションが多く、今回はその整理が主な成果となった。各形式の分類や使い分けなどに関しては、さらなる調査、また、談話資料などを用いた研究も必要であると考えられる。

【参考文献】

- 野田春美 (1997) 『日本語研究叢書9 「の(だ)」の機能』くろしお出版。
前田直子 (2009) 『日本語の複文—条件文と原因・理由文の記述的研究—』くろしお出版。
——— (2010) 「逆接表現共通調査項目解説」方言文法研究会編『『全国方言文法辞典』のための条件表現・逆接表現調査ガイドブック』科研費報告書, pp.31-44.
三井はるみ (2002) 「条件表現」大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック』科研費報告書, pp.85-101.

のま じゅんぺい (大阪大学大学院生)

nomajumpei@yahoo.co.jp